当たり前に，ありがとう

志學館中等部　一年　芳田（よしだ）　希音（きらら）

私は，海が大好きだ。海岸によって海の色や砂浜の種類が違い，見ているだけでもとても楽しい。私が海に行ったら必ずやることがある。それは，ゴミ拾い。未来の海でこの綺麗な景色を見れるように海を守っていくためだ。車には，ゴミを入れる袋と火バサミ，そしてまだ使えそうな拾ったスコップなどをゴミ拾いセットとして入れている。ゴミ拾いをしようと思ったきっかけは，小学一年生の時の自由研究だった。

自由研究で，海のゴミを拾って色ごとに分けるということをした。五人で三十分拾っただけでゴミ袋六袋分のゴミが集まり，たくさんの色があった。それでもまだまだたくさんのゴミが残っているということに衝撃を受け，海に行った際は必ずしようと決めた。ゴミも色々なものがあり，ライターやナイフなど，危険なものもあったり，中国語や韓国語など

の言葉で書かれているも物が流れてきていることもある。こんなものが海に流れているということを知り，悲しくなった。これからの海を変えていきたい，海の水を綺麗にしたいという思いが大きく，強くなり，行動に移すことができたのだ。水というものは，身近で，とても大切な存在なのだ。

身近にある水についてもっと学びたいと思い，鹿児島市にある環境未来館に行った。環境未来館は，環境に関する資料や展示，体験などを通して環境のことを楽しく学ぶことができる施設だ。私はここが好きで数えきれないほど来館しているが，展示を今まで以上にじっくり見てみようと思い，ここへ行った。四年前にリニューアルした際に，展示も大きく変わった。「飲み水として利用できるのは地球の０．０１パーセント。」このような言葉が書いてある展示がある．私は，この言葉を初めて見たとき，割合の低さにとても驚いた。今は世間に知れ渡っている持続可能な開

発目標ＳＤＧｓは二〇三〇年までに達成するべき十七の目標である。この中に，「安全な水を世界中に」という目標がある。現在，世界で約二二億人もの人が管理された安全な水を使うことができないという状況が続いている。そのため，衛生面や水の供給が不十分なため病気になってしまい，亡くなる人も多いそうだ。

日本には，浄水場が各地にある。小学四年生の社会の学習で，浄水場の見学をする機会があった。浄水場でろ過したり，消毒をしたりすることで，綺麗で安全な水が届けられるのだ。浄水場があるから，身近なところに綺麗な水があるのだ。逆に，浄水場がなければ，安心して水を使うことはできないだろう。水は生きていく上でなくてはならないものだ。水を十分に，自由に使えない人はたくさんいる。だが，管理された綺麗な水を安心して飲むことができる。そして蛇口をひねると綺麗な水が出てきて飲用水としても使うことがで

きる国はわずかな国だけ。日本は，とても恵まれているということが分かる。

今日も，蛇口をひねると綺麗な水が流れる。これは，綺麗な水を作るために関わっているたくさんの人と時間，そして努力があるから当たり前でいられるのだ。いつも水に感謝して使わないといけない。水を自由に使えることが当たり前。そんな私たちに，今できることは何だろうか。そう考えながら，今までとは違う思いで海へ向かった。